科学的社会主義の理論はどのようなものか

マルクスは、その文筆的および革命的活動のそもそものはじめから、社会学の理論にたいする彼の要請を、きわめてぱっきりと表明していることを、諸君はどうぞ注意していただきたい。すなわち、社会学の理論は、現実の過程を正確にえがきださなければならず、また、それ以上であってはならない、というのである。（たとえば、『共産党宣言』が共産主義者の理論の基準について述べていることを参照せよ。）　マルクスはその著『資本論』のなかで、この要請をきわめて厳格にまもった。彼は、資本主義的社会構成体を科学的に分析することを自分の任務として設定し、そして、われわれの目前に現実におこなわれているこの組織の発展が、この組織が不可避的にほろび、他のより高度の組織へ転化せざるをえない傾向をもっていることを立証したとき、そこで終りとしたのである。……

だれでも知っているように、科学的社会主義はかつて一度も、本末の意味での未来の見通しというようなものを、えがいたことはなかった。科学的社会主義は、近代ブルジョア制度の分析をあたえ、資本主義的社会組織の発展の傾向を研究することに――そして、それだけにとどめた。「われわれは世界にむかって言いはしない、」――と、マルクスはすでに 1843 年に書いている。そして、彼は、この綱領を正確に実行した、――「君の闘争をやめよ、それはつまらないものだ、と。われわれは世界に真の闘争の合言葉をあたえる。われわれは、ただ世界にたいして、いったいなぜそれは闘争するのかということをしめすだけである。そして、意識とは、世界がたとえそうしようとおもわなくても、いやおうなしにわがものに**せざるをえない**一つの事物なのである」〔1843 年 9 月、ルーゲにあてたマルクスの手紙、補巻４。２２４ページ〕。だれでも知っているとおり、たとえば『資本論』は、科学的社会主義を叙述した主要な、基本的な著作であるが、この『資本論』は、末末についてはきわめて一般的な示唆をするだけにとどめており、そのうちから未来の体制が成長してくる諸要素で、すでにこんにち現存しているものをしか考究していない。また、だれでも知っているように、未来の見通しについては、従来の社会主義者たちのほうがかぎりなくはるかに多く提供しており、そして、彼らは、人間が闘争なしにすませるような制度、人間の社会関係が搾取に立脚せず、人間の本性の諸条件に合致した真正の進歩の諸原則に立脚するような制度の絵図で人類を魅了しようと欲して、未来の社会をこまごました点までえがきだしたのである。しかし、――これらの思想を説いたきわめて才能ある人々や、きわめて信念の堅い社会主義者の密集部隊がいたにもかかわらず――大規模機械制工業が労働するプロレタリアートの大衆を政治生活のうずのなかに巻きこみ、そしてプロレタリアートの真の闘争スローガンが発見されるまでは、彼らの理論は生活から遊離しており、彼らの綱領は人民の政治運動から遊離していた。この闘争スローガンはマルクスによって、すなわち、ミハイロフスキー氏がずっと昔に――1872年に――マルクスについて批評している言葉を借りれば、「空想家によってではなく、厳格な、ままひややかでさえある学者によって」、発見されたのであるが、それは、まったくなんらかの見通しを媒介としてではなく、近代ブルジョア制度の科学的分析を媒介とし、この制度の存在するところでの搾取の**必然性**の解明を媒介とし、また、この制度の発展法則の研究を媒介として発見されたのである。……労働運動の普及と発展は、大規模な資本主義的機械制工業が発

展しているまさにその場所で、また、まさにそのかぎりで、争いえない事実となっており、社会主義の学説の成功は、この学説が人間の本性に合致した社会的諸条件について論議することをやめて、現代の社会関係の唯物論的分析と、こんにちの搾取制度の必然性の解明とにとりかかっている、まさにそのばあいに、争いえない事実となっている。

第一巻　「人民の友」とはなにか　P176~185

コメント

マルクスはこれまでの社会主義者が「人間が闘争なしにすませるような制度、人間の社会関係が搾取に立脚せず、人間の本性の諸条件に合致した真正の進歩の諸原則に立脚するような制度の絵図で人類を魅了しようと欲して、未来の社会をこまごました点までえがきだした」こと、空想的に未来を描いたことを批判し、「近代ブルジョア制度の科学的分析を媒介とし、この制度の存在するところでの搾取の**必然性**の解明を媒介とし、また、この制度の発展法則の研究を媒介として」「現実の過程を正確にえがきだ」すことの必要性を強調した。レーニンはこのようなマルクスの「現代の社会関係の唯物論的分析と、こんにちの搾取制度の必然性の解明とに」「社会主義の学説の成功」があることを述べている。

しかし、このことは、私たちが未来に向かって目をつむったり、共産主義社会に対する攻撃に口をつぐむことを意味しているのではない。『共産党宣言』は共産主義社会に対する様々な攻撃に反撃しており、エンゲルスも『反デューリング論』で「新しい社会秩序の「模範的な」体制を、歴史的に発展してきた現存の材料から、その必然的な結果として展開するのではなく、その反対に、彼の至高の頭の中から……構成するのだと主張するとすれば……最新の空想家にすぎないということになる。」と述べ、新しい社会秩序の「模範的な」体制を「現存の材料から、その必然的な結果として」展開することを否定していない。

現在の生産力と技術水準（IT 技術、トヨタの在庫管理技術、セブンイレブンの管理技術等々）を前提に、資本主義の廃止後の社会――見た目はまったく今の日本と変わらないが、権力を労働者階級が握ることによって社会的生産をコントロールするための社会的所有が実現し、豊かさが実感できる社会――のイメージを国民に積極的に語ることは是非とも必要であり、そのことが反共攻撃を打ち破るもっとも確実な方法でもある。「未来を語らない」ということが「未来を語れない」自分の能力の低さを隠す手段となってはならない。

ましてや、「自民党政治を大本から変えるという大目標を今度の選挙で目指すのはちょっと早いですね」といって現在の日本が抱える中心的な問題を解決するための民主連合政府の樹立という党の綱領的課題について何も語らないのでは、国民から見て、どの党も同じようなこと（ブルジョア民主主義的空文句）を言っているということになってしまう。